

『三国志演義』の「幸福」

井口千雪著
三国志演義成立史の研究

竹内 真彦

A5判 496頁
汲古書院
[本体 10000円+税]

黒岩涙香や読み残していたデイクスン・カーといったミステリと、歴史小説やらノンフィクションやら随筆やら学生時代から読んでおこうと思っていた思想書やらを交互にやっつけ、昨日の朝から吉川英治にかかった。やたらと詳しい人が大勢いるのに、私ときたら『三国志演義』について何も知らない。それではまずいだろう、せめて吉川版で、ということで一気にせめることにしたわけだ。

有栖川有栖「アポロンのナイフ」より

日本における『三国志演義』（以下、『演義』）は、「幸福」であり、それ以上に「不幸」な書物であった。井口千雪『三国志演義成立史の研究』（以下、「本書」）は、その「不幸」を救済してくれるかも知れない。

具体的に本書の内容に触れる前に、日本における、『演義』をめぐる状況を確認しておく必要があるだろう。

〈三国志〉という存在が、中国発のコンテンツでありながら、現代日本で高い認知度を持っていることは、多言を要すまい。そして、元来は中国正史の一である『三国志』に端を発しながら、〈三国志〉の物語として知られているのは、『演義』発祥のものであることも。

三〇年程前まで、日本において〈三国志〉と言えば、吉川英治の小説『三国志』（以下、「吉川三国志」）を指すことがほとんどであったろう。その吉川が執筆の際、主たる原拠としたのは『通俗三国志』であった。これは、元禄年間に刊行された『演義』の本邦初訳である。

吉川三国志は、その序盤こそ吉川の創意に富んだ物語が展

開されるが、読み進むほどに『通俗三国志』に近づいてゆく。武断的に言ってしまうえば、序盤以外では、諸葛孔明の死で物語を終える点のみが、吉川三国志における独創であるに過ぎない。つまり、吉川三国志によって広く知られることになった(『三国志』)の物語とは、『演義』の物語に他ならない。『三国志』の認知度の高さを考え合わせれば、『演義』は、吉川三国志を媒介として、近代以降の日本にあって広く読者を獲得した、と言えよう。この点において、『演義』は「幸福」な書であった。

その一方で、吉川三国志を媒介とするからこそ、『演義』そのものは読まれて来なかったのではないか。吉川三国志以降、孔明の死後を扱う小説が幾つか刊行されているが(柴田鍊三郎作品など)、その際、「新しい三国志」として認識されることも多々あった。ところが、その内容を閲してみると、少なくとも物語の基調は、『演義』の終盤と一致するものが多く見られるのである。つまり、『演義』そのものが読まれていないからこそ、これらの作品は「新しい」と評価されたのである。

『演義』そのものが読まれて来なかった、もう一つの理由が、正史『三国志』(以下、「正史」)の存在である。これも多言を要すまいが、三世紀末に、西晋の陳寿が著した史書であ

り、現在では陳寿の死後一三〇年ほど経って附けられた裴松之の註とともに読まれるのが通例となっている。『演義』の成立年代は、現在のところ、一六世紀前半より遡らぬ方が無難であろうから、裴松之註を含めても、正史は、『演義』よりも千年以上前に成立したことになる。

となれば、後漢末から三国時代にかけての、「歴史的事実」を知りたいのであれば、正史こそ、読むべき書である、ということになる。『演義』は所詮「歴史小説」に過ぎないのだ。

めぐり合わせの悪いことに、正史の邦訳刊行は、吉川三国志の登場以降、随分経ってからのことであった。筑摩書房『世界古典文学全集』の一冊として『三国志』第一冊が刊行されたのは一九七七年、最後の第三冊が刊行されたのは一九八九年のことである(ちなみに、吉川三国志は、一九三九年から四三年にかけて連載され、初の単行本は一九四〇年から一九四六年にかけて刊行されている)。日本人にとつて、正史は、「歴史小説」である『演義』に千年以上先行する「史書」とすると同時に、吉川三国志よりも「新しい」存在だったのである。

結果、吉川三国志(あるいはそのフォロワーたる作品群)によって『三国志』を愛好するようになった読者の多くは、正史に興味を向けた。換言すれば、『演義』は、吉川三国志と正史によって、読まれる機会を奪われて来た。評者が、『演義』

を「不幸」な書である、という所以である。

学術的研究に眼を向けると、一九九〇年代は、日本国内における『演義』研究が隆盛であった、と言えるであろう。『演義』を主題とした専著に限っても、金文京『三国志演義の世界』（東方書店、一九九三、二〇一〇年に増補版が刊行）と井波律子『三国志演義』（岩波新書、一九九四）という二冊の入門的学術書、および、それまでの版本研究の集大成である中川論『三国志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八）が刊行されている。無論、その後も『演義』研究が停滞していたわけではない。しかし、集大成であったがゆえに、中川の著作が劃期となり、日本国内の研究者による学術的専著が刊行されなかったのも事実である。大袈裟に言えば、井口千雪による本書は、二一世紀初の、日本における『三国志演義』研究書、ということになる。

以下に、本書の構成を見ておこう。

序 章 諸版本の体裁から見た刊行経緯と受容のあり方
導論篇（第一章 成立と展開―段階的成立の可能性―）
前 篇 「原演義」から諸版本へ（第二章―第四章）
後 篇 「羅貫中原本」の成立と「原演義」への発展

（第五章―第七章）

結 語

紙幅の関係もあり、序章については措く。導論篇で、前篇と後篇の梗概をあらかじめ示し、前篇と後篇で、それぞれのテーマについて掘り下げてゆく、という構成である。

前篇と後篇のテーマとして現れる、「原演義」と「羅貫中原本」という用語には説明が必要であろう。また、これを説明することによって、本書が何を研究しようとしているのかも明らかとなる。

まず、「原演義」についてである。実は、現在発見されている『演義』版本の中、「原作（＝全ての版本の祖本）」だと断定されているものはない。それゆえ、『演義』の版本研究では、テキストそのものの異同や周辺情報により、これを整理し、系統づけようと意図して来た。先に挙げた中川の著作が、その集大成となる。

まだ駆け出しの研究者と言ってもよい井口千雪が見ようとしているのは、その先である。従来の研究で、存在が措定されているに過ぎない「原作」を、「原演義」と称し、「それがどういふものであるのか」を、比較的古態をとどめているとされる三種の版本のテキストを比較することによって、描き出そうとする。

「異なる版本のテキスト比較」という方法自体は、版本研究の基本である。井口の研究で驚嘆すべきは、その「徹底性」

にある。井口は曰う。

筆者は、葉逢春本に嘉靖壬午序本の異同を一字一句書き込む作業を行った上で、簡本系諸本の一つ劉龍田喬山堂本（以下劉龍田本）についても異同を葉逢春本に書き込む作業を行った。（一八六頁）

「言うは易し」である。試みに『演義』嘉靖壬午序本の字数を計数したところ、五五万を遙かに超える。三種に限ったとは言え、その一字一字を比較しようと言うのである。

井口自身の言うように、全篇について作業が終わっているわけではなく、「四分の一ほどを終えた」（二三九頁）段階ではある。それでも、得られたものは大きかった。それを逐一挙げることはしないが、「第四章 関索説話に関する考察」にだけは触れておきたい。

関索は、関羽の三男として知られるが、史書には現れない架空の人物である。現在の通行本である『演義』毛宗崗本では、第八十七回、孔明の南蛮征伐の出陣に際して、唐突に現れて従軍し、いくらかの活躍をした後、姿を消す（死ぬわけではない）。父である関羽の死に際しても名が現れぬことや、南蛮征伐後の北伐では、彼の兄にあたる関興（こちらは史書にも現れる）が活躍することもあり、その登場も退場も唐突である観は免れない。

また、古態を留めるとされて来た、葉逢春本にも嘉靖壬午序本にも関索は登場しない。それゆえ、『演義』の流传過程の中で「後補」されたと考えられることが多かった。

ただ、「後補」と考えると、大きな問題が一つ残る。関索説話は、大きく三分される『演義』の版本系統の中、二系統に跨がって、ほぼ同じ形で出現しているのである。このことを矛盾なく説明しようとすれば、「後補」ではなく「原演義」の段階で存在していたと考えるのが、最も明快である。しかし、とすれば、古態を伝えるはずの葉逢春本と嘉靖壬午序本とに関索説話が無い理由を説明し難くなる。それゆえ、従来の研究では、「原演義」の段階で関索説話が存在した、との見解が採られることはほとんどなかった。

これに対し、本書は、「原演義」の段階で関索説話が存在していた可能性を指摘する。そして、葉逢春本と嘉靖壬午序本は、「それぞれ」関索説話を削除した、と考えるのである。卓見であり、『演義』研究の積年の課題が解決した、かに見える。ただ、この箇所に限れば、結論を急ぎすぎた、とも思う。中川（北従来)の定説は、葉逢春本の属する系統と劉龍田本の属する系統の祖本（A）をまず想定し、嘉靖壬午序本や、劉龍田本に類似した関索説話を収録する周曰校本などの系統は、この祖本以前に分岐した、との立場を採る。であればこ

そ、二つの系統に跨がって出現することとなる、関索説話が問題となるのである。

これに対し、本書は劉龍田本と嘉靖壬午序本（と周曰校本）に共通する祖本（B）を想定している（葉逢春本はこの祖本以前に分岐）。ならば、B以前の段階（葉逢春本はこの流れを引く）には関索説話はなく、Bの段階で挿入され、嘉靖壬午序本のみが、関索説話を削除した、と考えることも可能であろう。

評者が閲したところ、「孔明一擒孟獲」の段では、劉龍田本と周曰校本の文章が近似し、嘉靖壬午序本は、その文章から関索の出現する句を削除したと思しい（逆もあり得るが）。ところが、葉逢春本は、文章が大きく異なる。少なくともこの箇所については、葉逢春本が、「原演義」には存在していた関索に関する記述を、意図的に削除したと判断するのは難しいように思う。

だが、これは微瑕に属することであろう。精緻な校合に基づき、「原演義」探求の論は、説得力に富む。

後篇では「羅貫中原本」がテーマとなる。上述したように、井口は、現在発見されている版本すべての祖本を「原演義」と称するが、加えて、この「原演義」にもまた、何段階かの祖本が存在する可能性を指摘するのである。その遡り得る最初の段階を「羅貫中原本」と称する。

発見されていない「原演義」の更に前段階の姿を考察しようというのだから、これはかなり大胆な試みである。しかし、史書の利用方法を実証してゆくことで、これまで誰も踏み込み得なかつた、『演義』の原初形態を描き出す。

ここもまた「言うは易し」である。「他にも『資治通鑑紀事本末』・『陸氏通鑑』・『通鑑節要』を比較対象として研究したが、『演義』本文に用いられている形跡は無かつたため除外する」（三四七頁）という一文の何と重いことか。

後篇の議論に、「屋下に屋を架す」の嫌いが無いとは言わない。しかし、版本研究の先へ進もうとする井口の意志は高く評価したい。また、『蜀漢本末』との関係という、従来の『演義』研究では言及されることのなかつた事実を「発見」したことは特筆に値する。

おそらく、『三国志演義』は、現時点で「最良の読者」を得た。それは『演義』にとって最上の「幸福」であろう。同じく『演義』を研究する者の一人として、多少の嫉妬を感じながら、この『演義』の「幸福」を祝福したい。

願わくは、自らが本書に続きたい、と心底思う。

（たけうち・まさひこ 龍谷大学）